

（1）名寄市立風連中央小学校

「心のバリアフリーを」～総合的な学習の時間を通して

報告者：北海道社会福祉協議会 福祉教育専門委員 吉田かおり

I 視察月日

令和4年11月12日（水）



II 視察場所

名寄市立風連中央小学校
〒098-0507 名寄市風連町西町201番地

III 学校の概要

旧風連町市街地にあり、市街地全域と豊里・瑞生・中央・旭・日進の5地区と平成28年度に東風連小学校、平成31年度に風連下多寄小学校が統合となり、西風連を加えた8地区が校下となっている。町の基幹産業は農業であるが、保護者の多くは給与生活者である。校舎は建築以来相当数の年月を経ており、平成30年度に新校舎が完成した。

児童数110名、教職員20名で構成されている。保護者や地域の学校教育に対する関心は高く、学校の教育活動やPTA活動にも協力的である。また児童の安全安心のための安全安心見守り隊や総合的な学習の時間への協力等、町内会や高齢者の方々に多くの部分で協力していただいている。

児童は明るく素直な子が多い。落ち着いた生活態度がとれ、学校行事の準備や片付けなどの仕事も責任をもって行動する子が多い。

学習面では課題にまじめに粘り強く取り組む児童が多い反面、受け身の児童も多く、固定した人間関係の中で、競争意識や問題意識に課題があり、切磋琢磨・創意工夫などの積極性が望まれる。

（資料提供：風連中央小学校）

IV 活動の特色

<活動のねらい>

様々なボランティア活動を行うことで、家庭・地域の人々・自然との関わり大切さを児童に体得させる。地域社会に役立つ喜びを味わわせ、さらに社会に貢献しようとする心を育てる。

ボランティアとしてのねらいは上記に記載したものとなる。ねらいを達成するために、以下の通り年間計画を立て、コロナ禍ではあるものの、できることを考え授業を進めている。

月	活 動 内 容	摘 要
4月	学習支援ボランティア	2学期から月に1～2回
5月	緑の羽根募金	全学年での取組
6月	ふれあい農園活動（～10月）	各学年での取組
7月	親子ボランティア（校舎の窓拭き・校区のごみ拾い）	全校で任意の取組
8月	しらかばハイツ慰問	6年生で鼓笛披露
9月	教育講演会 グループハウス慰問 クリーン作戦	風っ子プロジェクト事業との連携 敬老会に4年生でよさこいを披露 CSと連携（町内ごみ拾い）
10月	ユニセフ募金、赤い羽根募金グループハウス慰問	児童会やPTA役員が中心となって企画 低学年による学習発表会での音楽等の披露

11月	瑞生大学との交流学習	昔の暮らし等の伝承
2月	ふうれん冬祭り	よさこいで参加

V 社会福祉協議会との関わり

授業は、社会福祉協議会職員が開始からすべてを担当。ここまで密な関わりはなかなか見ることができない。子供たちの名前を覚え、子供たちも指導者の名前を覚えてということは、日頃からの親交の深さが伺われる。



1 社会福祉協議会として「3つのパラスポーツ体験」を通して学ばせたかったこと

<前時までの活動>

○車椅子ユーザー・視覚障がい・聴覚障がいの方との交流を通してそれぞれの障がいについてできることや苦手なことを学ばせる。

<本時の活動>パラスポーツの体験

○パラスポーツを行っている動画の視聴を通し、ルールが考慮して設定されたそれぞれのスポーツの巧みな動きを知る。

○自分たちが同様の体験を行い、なかなかうまくいかないことを通して、選手は難しい動きを練習や訓練でできるようになることに気付かせる。

○音が出るボール、玉を転がすスロープ、触ると目印となる紐などの用具の工夫、立ち上がることができないなどの動きの制限によって、パラスポーツはさまざまな障がいに対応していることを理解させる。

IV 児童の様子

①視察当日は3つの体験



・1時間目「シッティングバレー」

1956年にオランダで戦争によって体が不自由になってしまった人々により、動きの少ない“シットボール”と“バレーボール”を組み合わせでつくられたスポーツ

・2時間目「ゴールボール」

第2次世界大戦で視覚に障害を受けた傷痍軍人たちのリハビリテーションプログラムとして1946年にドイツで考案





・3時間目「ポッチャ」

ヨーロッパで生まれた重度脳性麻痺者もしくは同程度の四肢重度機能障がい者のために考案されたスポーツ

3時間続けた体験を十二分に楽しむことができたと考える。

②振り返りの時間

当日に振り返りの授業がなかったので、感想を後日いただいた。以下の通り。(抜粋)

* シットイングバレー

- ・足が使えない分、腕を使って移動しているのに驚いた。
- ・足が不自由な人の大変さがよくわかった。

* ゴールボール

- ・音で判断するのが難しかった。
- ・声かけは大事だと思った。
- ・床についている目印の紐を見失うとどこにいるのか分からなくなる。これがないと困る。

* ポッチャ

- ・誰でもできるから不公平ではなくてみんなが楽しめた
- ・目の不自由な人はジャックボールがどこにあるのか分からないので少し不利だと思う。

ポッチャの感想が興味深い。「公平だと思う子供」と「改善が必要と思う子供」がいる。今後、これらの感想を生かし、誰もが参加できるゲームの開発が進むと考えるとわくわくする。

V 意見交換

<構成> 名寄市立風連小学校：佐藤教諭（5年担任）

名寄市社会福祉協議会：小笠原係長

福祉教育専門委員会：吉田 かおり（委員）

北海道社会福祉協議会：一戸主事

計4名

<内容>

1 社会福祉協議会として

積極的に授業に関わりを持ってきた。

チーム・ティーチング（※）により、社会福祉協議会をT1（※）とし、担任はT2（※）に徹する授業を展開している。関係者や関係機関、必要な道具等全て社会福祉協議会が行っている。

今回3時間をかけて体験を行った理由については、3つを続けて大変することにより、違いを時間させるためであり、そのことにより、比較検討が容易になり新しいゲームの開発につなげやすくなると考えている。

また、音が出るボール、玉を転がすスロープ、触ると目印となる紐などの用具の工夫、立ち上がることができないなどの動きの制限によって、パラスポーツはさまざまな障がいに対応していることも理解していた。

助成金に関しては、パラリンピックの選手を講師に招くなど有効活用している。

（※）学習指導方法のこと。T1（全体支援）、T2（個別支援）が一般的。

2 福祉教育専門委員として

実体験することにより、子供たちはより深く対象の事象について考えることができることがわかる。今後、自分たちで「新しいゲーム」を考えていくとのこと。この学校から、世界に発信し世界中に広がるかもしれない「新しいゲームが開発されるかも」と考えるだけで笑顔になれる。

ゴールを考えると、新しいゲームを作るにとどまらず、そのゲームを

○誰に体験させるのか

○持続可能な形にするにはどう進めるとよいのか

授業をつなげることに期待をする。その時は、大人の力が必要になってくるので社会福祉協議会とともに、教職員も積極的に参加し子供たちの成長に寄り添って欲しい。

今後の課題をあげるのであれば、上記にも簡単に述べたが、授業としての教師のかかわりと言える。日常的に子供たちに「心のバリアフリー」を考えさせてほしい。そのためには、年間の教育課程とのつながりを洗い出し、意識の強化を図ることが大切である。そうすることにより、「持続可能な活動、または発展的な活動につながる」といえよう。